N E W S L E T T E R

東京大学大学院人文社会系研究科

多分野交流プロジェクト研究ニューズレター

2001 年 5 月 23 日

目次

八百屋さんにも負けず：多分野交流プロジェクト 2001 年度開講にあたって……沼野　充義

プロジェクト案内
人間の尊厳、生命の倫理を問う……竹内　整一
80 年代のアジア　―選択の果実……桜井由躬雄
古代ギリシャ・ローマ研究の方法……逸身喜一郎
環境―その自然と人為―(2)……松永　澄夫

32

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tabunya/

八百屋さんにも負けず

多分野交流プロジェクト 2001 年度開講にあたって

担当委員　沼野　充義

詩人の岩田宏の書いた言葉の中に、とても印象的なものがあって、ときとき思い出す。岩田さんは、ナボコフ（ロシアの作家）やアーウィン・ショー（アメリカの作家）の翻訳をしたり、樋口一葉の研究をしたり、小熊秀雄の詩集の編纂をしたり、とてもいろいろなことに携わってきた。そこで、「この人物、少々分裂ぎみではないかと思う方もあろう」ということになる。「しかし、なりゆきでこうなったのだから、本人としてはどうしようもないのだ。本人の内側では、これら四、五人のひとびとは繋がっていないこともない。／それに洋の東西はあっても、いずれもさして広くない文学畑の人びとではないか、町の八百屋さんのほうが私などよりも、遥かに数多い品目を常時とりあつかっている」（岩田宏『雷雨をやりすごす』草思社、1994 年、122 ページ）。

なるほど。まったくそのとおり。文学部のわれわれも、多分野交流などというエラそうな（あまり感じのよくない？）名前を振りかざしてにわかに無理な構えを作っても、町の八百屋さんに完全に負けているのではないか。名前も八百屋のほうがはるかに自然だ。

まあ、それはそれでいいのではないかとも思う。文学部（人文社会系）の学問は蛸壺的だとよく批判されることがあるが、そんなことまともに学問している人間ならば当たり前ではないか、とたまには正面から堂々と反論する人がいてもいい。一生こつこつ研究を積み重ねても、××語やそれによって書かれた文献の奥義など極め尽くせるものではない。その他の言語や、自分には縁遠い異国の宗教、当世はやりのポスコロやらカルスタ、はたまたわからんラカンの精神分析理論やら、構築やら脱構築やら、そんなことに構っている場合ではない。そもそも、自分が専門としている一人の作家、一冊の書物、一つの現象について書かれた研究書や論文だけでも、一生か

かっても読みきれないほどあるのだ。多分野なんてとんでもない！　そんな暇があるくらいなら、もっともっと狭い専門の研究を深める努力をするべきだ！

　といったことを文学部の人間なら誰でも、何もわかっていないわからず屋たちに対して一度は叫んで溜飲を下げたい、といった願望を心のどこか片隅に隠し持っているのではないだろうか。何を隠そう、私もその一人です。

　ただし、誤解を避けるために申し添えておけば、上に書いたことは意図的な反語的表現であり、そういった論を当然の前提として踏まえ、踏み越えていくことこそがまっとうな専門の深め方であり、また「文学部的」な学問の生き残りの道だと私は信じている。どうしてそうなのか、ということについては、これまでの様々なプロジェクト、そして今年度新たに始まる４つのプロジェクトが雄弁に示しているとおりである。

　もう一つ、逆説的なことを言い添えれば、おそらく究極的に目指すべきなのは、多分野交流のさらなる発展というよりは、多分野交流などという変な名前の看板を出す必要がない状態ではないかと思う。どのような学問も深めれば深めるほど、高度に専門的になっていくと同時に「多分野的」な面を持たざるを得ないのだとすれば、ことさら「私は多分野やってます」などという看板を掲げること自体、おかしなものだ。そう考えた場合、すぐに浮かび上がってくる疑問は、現在、いくつかの特別な「多分野演習」をやっていれば、それで十分なのか、ということではないだろうか。「多分野的」な視点がなければやっていけない授業や演習は、平素の基本的なものにこそ、たくさんあるように思うのだが。

　というわけで、今年度も多分野交流プロジェクトは、昨年度までの伝統と成果を引き継ぎ、続けられていきます。岸本美緒先生の後を受けて、今年度からは私、沼野がプロジェクト全体の交通整理役をつとめさせていただくことになりました。事務の担当は引き続き、情報メディア室の堂前香織さんです。

　このニューズレターは「多分野」活動のよき伝統の一部になっていると思われますので、今年度も昨年と同様のペースで刊行していく予定です。単なる連絡・報告の場だけでなく、多少なりとも皆様のご意見を掲載できるフォーラムにもしたいと考えておりますので、多分野交流に関するご意見やご批判、また多分野交流に関係のある情報などもぜひお寄せください。

　不慣れな仕事で、あれこれ至らぬ点や不手際があるかもしれませんが、皆様の積極的なご批判やご助言を仰ぎながら、さらに多分野交流を発展させていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（2001 年 4 月 26 日記）

プロジェクト案内

人間の尊厳、生命の倫理を問う

主査　竹内　整一

水曜５・６時限

人間が尊厳であるとする（ならば、その）思想根拠から、現代医療の現場で生命倫理の実際までの様々なレベルの問題を多分野交流的に問う。

教官担当者は、学内からの

竹内整一　（倫理学）
島薗進　（宗教学）
一ノ瀬正樹　（哲学）
斉藤明　（仏教学）
油谷浩幸　（工学部　先端学際工学）
数間恵子　（医学部　看護学）

の６人のメンバーと、学外からの

川本隆史　（東北大　応用倫理学）
森岡正博　（大阪府立大　生命学）
猪瀬直樹　（作家）

の３人のメンバーで構成される。

演習室は、原則として、多分野交流演習室を使うが、人数等の事情で変更する場合もある。

日程とテーマは以下の通り。

4.18	竹内整一	空即是色の荘厳
5.23	川本隆史	ケアの倫理と制度
6.27	島薗進	現代宗教の「人間」把握
7.18	森岡正博	生命倫理学の最新の動向
9.26	数間恵子	遺伝医療における生命倫理と看護
10.25	一ノ瀬正樹	殺人をめぐる人間の尊厳
11.21	猪瀬直樹	文学者の自死をめぐって
12.12	斉藤明	仏教における人間の尊厳
1.9	油谷浩幸	ヒトゲノム解析と医療

（単位は、修士・博士課程に対して年間２単位）

プロジェクト案内

80 年代のアジア
―選択の果実

主査　桜井由躬雄
木曜５・６時限

　８０年代の国際情勢は以下の諸点にまとめられよう。（１）先進国における小さな政府志向（レーガノミクス、サッチャリズム）、（２）アジア諸国における緊張緩和、（３）第二次石油ショック後の景気停滞、（４）プラザ合意後の日本のアジア直接投資の増大、これをうけてアジアは先進国の経済全般の停滞に比して、アジアの奇蹟とよばれる急速な経済発展を開始した。閉鎖的な経済体制は多くの国で開放体系にきりかえられるとともに、開発独裁体制が行き詰まってくる。８０年代は６０年代以降、アジアの諸国が模索した経済発展の道がようやく一応の結論、グローバリゼーションという道を見いだした時代である。本演習では、各国、各地域ごとにその道がどのように模索され、どのような問題を生んだかを検証していく。

年間日程とテーマ

4 月 19 日　総論
5 月 10 日　アフガニスタン問題（パキスタン）
5 月 17 日　ドイモイ（ベトナム）
5 月 24 日　先進国経済化（韓国）
5 月 31 日　　小平時代（中国）
6 月 7 日　カンボジア戦争（カンボジア）
6 月 14 日　ソ連崩壊（ソ連）
6 月 21 日　民主化（台湾）
6 月 28 日　二月革命（フィリピン）
7 月 5 日　マハティール（マレーシア）
9 月 6 日　「普通」の経済発展（インドネシア）
9 月 13 日　8 月事件／ネ・ウィンの終焉（ビルマ）
9 月 20 日　会議派の崩壊（インド）
9 月 27 日　総括

プロジェクト案内

古代ギリシャ・ローマ研究の方法

主査　逸身喜一郎

金曜５・６時限

昨年度に引き続き月１回のペースで、ギリシャ・ローマ世界の総合的理解をめざす〈多〉分野交流演習を、哲・史・文、〈他〉分野との相違を意識しながら／するべく、今年度も開催する。同じテクストを取り上げつつも扱い方のみならず読み方にも哲・史・文それぞれに違いが生じるのは、究極の対象が違うのか、それとも方法の相違の反映なのか、はたまた問題意識の現れなのか。

博士論文を書く場合、当然のことながら新たな知見が求められる。とはいえ最良の知性が何世紀にもわたって絨毯爆撃を繰り返してきた古典研究のような分野では、もはや焼け跡からは一草一木、生えてこないように見えるかもしれない。いや、大問題は依然未解決のまま残っているけれども、ただしひょっとすると解決が金輪際不可能ゆえに残っただけのおそれもある。それでも学問は先鋭化する宿命にある。マックス・ウェーバーがいみじくも古典文献学を例にひいて、細部の探求に意欲を感じなければ研究者になれないことを指摘した頃と、職業としての学問の根本は変わっていない。

その一方でギリシャ・ローマ世界を大きな視野でとらえることが、広く世間で求められている。歴史離れの著しい現代の風潮をいましめることそれ自体は歓迎されるべきことだが、しかし大風呂敷をひろげ、現代とのアナロジーやあるいはアジアとの相違に力点を置いて、「役に立つ世界観」を鼓吹する書物が、学問とは無関係に跋扈するのもまた困った事態である。

研究者は自分がつまびらかにしようとしていることが、大きな枠組みのどこにどのように位置するかを、ひとに説明できなければならない。その際、自分の「所属する」学問分野の常識だけでは、説明が行き詰まることもある。説明される側の無知に呆れるのは簡単ではあるが、説明する側にも反省が必要である。

従来の分野意識をすこしずらせば、未開拓な問題が新たに見えてくるかもしれない。方法が対象をしばっていることもなしとしえないからである。

初回（第０回　４月２０日）に参加できなかった諸君への案内をかねて、今後の予定を記す。教官が１時間半の発表をして、参加者全体の質問・討論という形式は、昨年と同様である。

第 1 回　5 月 25 日　逸身喜一郎(文)
第 2 回　6 月 22 日　神崎繁(都立大学　哲)
第 3 回　7 月 13 日　櫻井万里子(史)
第 4 回　10 月 5 日　天野正幸(哲)
第 5 回　10 月 26 日　島田誠(学習院大学　史)
第 6 回　11 月 16 日　大芝芳弘(都立大学　文)
第 7 回　12 月 14 日　未定

自己批判は他人の批判より難しいと通常、思われがちだけれども、他者を手際よく批判することも決して易しくない。練習が必要なのである。

プロジェクト案内

環境―その自然と人為―(2)

主査　松永　澄夫

木曜５・６時限

開設の趣旨：

人間の生存の基礎は生命体にとっての自然環境であり、更に社会環境が人々の生活を制約すると同時に、可能にし、文化環境が生の質を決定し、かつ表現している。環境は人間に対して与えられている資源であると同時に、そこに人々の活動の軌跡が否応なしに刻み込まれ蓄積されるものである。また、だからして、人間が意図的に或る方向へと形成するべきものでもある。こうして、環境の概念においては、事実の中に価値が書き込まれ、自然は既に人間の文化と社会との関係の中に引きずり込まれている。環境の行方は、人々が社会の存立の条件として最も関心をもつべきものの一つである。一見は単純に見える環境概念を、それが内包する重層的・複合的価値構造に焦点を当てて考察したい。

＊　＊　＊

この演習は二年目に入り、昨年より多くの教官に参加していただけることになりました。ただ、昨年度は隔週でしたが、今年度は月一回にしました。ですが、一回の密度を高くしたいと思っています。そして、共同で一冊の本の出版に漕ぎつけたいとの希望をもっています。教官参加者と日程等は次のようになっています。

併任教官：

鬼頭　秀一　　東京農工大学農学部
小泉　義之　　宇都宮大学教育学部

連携教官:

萩原なつ子　　宮城県環境生活部
堀川　三郎　　法政大学社会学部

学内教官：

佐藤　宏之　　東京大学大学院新領域創成科学研究科
似田貝香門　　東京大学大学院人文社会系研究科

松永　澄夫　　東京大学大学院人文社会系研究科
藪内　　稔　　東京大学大学院新領域創成科学研究科

任意参加教官：
桑子　敏雄　　東京工業大学大学院社会理工学研究科
杉田　正樹　　関東学院大学文学部
村瀬　　鋼　　成城大学文芸学部

日程（すべて木曜日 17 時〜20 時 20 分　法文 1 号館 315 番教室）および**話題提供者**：

4 月 26 日	佐藤	「ヒトはどのように生活してきたか」（特定質問者：松永）
5 月 10 日	似田貝	「環境問題と環境の規範形成」
6 月 7 日	小泉	「対自然の倫理」
7 月 12 日	萩原	「環境とジェンダー―環境問題のとらえ方とその言説をめぐって」
10 月 4 日	藪内	「環境心理学における最近の動向と展望」
11 月 8 日	堀川	「歴史的環境保存と都市」
12 月 13 日	村瀬	「儚いものと持続するもの__風景の私性と環境の公共性」
1 月 24 日	鬼頭	「開発と環境にかかわる合意形成と環境倫理」

「多分野交流ニューズレター」
第 32 号
平成 13 年 5 月 23 日発行
東京大学大学院人文社会系研究科
多分野交流プロジェクト研究
ワーキンググループ事務局発行
責任者　沼野　充義
TEL: 03-5841-3846

連絡先　情報メディア室
TEL: 03-5841-3880
FAX: 03-5841-8949

Edited by
Kaori Domae
Noboru Koshizuka